

民数記

の 4 つ目の書である民 数記は

奴隷にされていたイスラエルが エジプトから救い出された

あとの話になります 神はイスラエルをシナイ山に導

き彼らと契約を結びました そして彼らの背きの罪にもかかわらず

天幕に満ちるご自身のきよい臨 在のそばで

彼らが暮らせる道を備えられた のです

民数記はイスラエルがシナイ山 での 1 年の滞在を終え

神がアブラハムに約束された地 を目指し

荒野に出ていくところから始まり ます

この書は旅の進み具合に沿って 構成されています

最初のセクションはシナイ山から 始まり

パランの荒野に旅立ちます 次に約束の地の真向かいにあたる

モアブの平野を渡っていきます 冒頭では民の人口調査が行われ

民数記というタイトルもここから ついています

またイスラエルの部族には 宿営するときの配置についての

律法がありました まず中心に会見の天幕その周り

に祭司とレビ人 そしてその周りに 12 部族がユダ

族を筆頭にきちんと配置されます これは神のきよいご臨在が民の

中心にあったことの象徴でした その次には

レビ記のきよさについての律法 をさらに発展させたものが続

きます 神が彼らのただ中にいてくださる

なら このきよい神をお迎えするために

宿営をきよく保つ あらゆる努力をしなければなりません

10 章では神の臨在が宿る雲が天 幕の上に現れ

民をシナイ山から荒野へと導き ますが

その途端事態は悪化します 11 章では空腹とどのの渴きについて

文句を言い エジプトに帰りたいと訴え始めました

12 章ではモーセの兄と姉も彼に 立てつき

皆の前で彼を非難しました 旅は最悪のスタートとなっ

てしまいました 次のセクションでは

イスラエルはパランの荒野に到着 します

約束の地までちょうど半分ほど の道のりです

神はモーセに 12 部族から一人ずつ 選び出し

約束の地を偵察させるように命 じました

戻ってきた偵察隊たちのうち 10 人はイスラエルに勝ち目はなく

カナン人に滅ぼされるだろうと 言いました
しかしカレブとヨシュアの二人 は
神が助けをくださるだろうと 言いました
すると残りの 10 人は民を扇動して 反乱を企てました
新しい指導者を立てエジプトに 帰ろうとしたのです
当然のことながら神は怒りモーセは民のためにとりなしました
モーセはアブラハムへの約束を 守ってくださいと懇願しました
神はその願いを聞き入れました が
そのために正義を曲げはしませんでした 約束の地に入りたくないと言った
者には そのとおりにしてやることにして
この世代が死に絶えるまで 40 年 荒野をさまよわせると宣告された
のです 彼らの子ども世代が約束の地に入る
ことになりました 彼らがこれで目を覚ませばよかった
のですが事実は逆でした レビ人の一団がモーセとアロン
に対して あなたたちは分を超えていると言って
立ち向かったのです 神はこのレビ人たちに厳しく対処
し ご自身がモーセとアロンを民の
指導者に立てたことを 改めて宣言されました
こうしてイスラエルの民はパラン を旅立ちましたが
彼らの態度は改まっていません でした
のどの渇きを訴えて不平をと な え
なぜエジプトから連れ出したのか とさえ言ったのです
そこで神はモーセに岩に命じて 民のために水を出せと言いました
しかしモーセはそのとおりに は しませんでした
言われていないのに岩を 2 度打ち 逆らう者たちよ
われわれがこの岩から水を出して やらねばならないのかと言った
のです モーセは自分が水を出したかのように
神を押しつけてしまいました そのためモーセは荒野をさまよ
い続ける民と 同じ運命をたどることになりました
彼も荒野で死に約束の地には入れない のです
民はこのあとも神に逆らい神は 一風変わった裁きをくだしました
毒蛇が現れ民を噛んだのです モーセが再び民のためにとりなす
と神は次のように命じます 青銅の蛇を作り棒の先に取り付け
て上げること その蛇を見上げたものは蛇の毒
から癒される 奇妙な方法のようですが
これは神がご自身の契約に誠実 であることを現わしています

神はイスラエルの悪と罪に裁きを下すのにふさわしい方です
しかし癒やしを求めて神を見上げる者に対しては
その裁きさえ命の源に変えるのです
この後民はモアブの草原に向かいます
このセクションではまずバラムという変わった人物
に焦点を当てます モアブの王は自分の領地を横切って
いくイスラエルの大集団に恐れをなし
彼らを呪うために魔術師を雇いました
バラムは3度にわたってイスラエルを呪おうとしたのですが
3回ともそれができず逆に祝福してしまう始末でした
これはアブラハムへの約束を思い起こさせます
神はバラムにイスラエルを呪わせず
かえって祝福させただけではなく
いつの日かすべての国に神の義をもたらす
イスラエルの王についてのビジョンを彼に見せたのです
このビジョンは創世記49章でヤコブがユダに与えた祝福の言葉
をも思い起こさせます ここでこれまでの流れを振り返
ってみましょう イスラエルは荒野で神に対する
反抗を幾度も繰り返し しかも段々とたちが悪くなって
いきました それに対し神は裁きも下しました
が憐れみも示し 旅の間ずっと食べ物と水を与え
続けてきたのです このバラムのストーリーでは
神の恵みはさらに鮮やかに描かれています
文句を言い反抗し続けるイスラエルを
神は彼らが気づきもしない丘の上で 守り祝福しているのですから
この荒野におけるイスラエルの頑なさ
と神の誠実さのコントラストが後の世代のイスラエルにとって非常
に重要になってくるのです 荒野でのストーリーは後世の預言者
や詩人 そして新約時代の使徒たちによって
さえ繰り返し語り継がれました そしてそれはいつも警告でした
神はご自身の契約にいつも誠実であられる一方
民がそれに反抗しその報いを受けるのを許容なさるということ
です このあと 民数記は荒野世代の子どもたち
に焦点を当てます 彼らは約束の地を受け継ぐ準備
を始めました 新しい世代の人口調査を行い近隣
諸国との数々の戦に勝ち いくつかの部族は約束の地に落ち着

きました 民数記の最後は新しい世代が約束の地
に入り モーセが知恵と警告を伝える最後の
説教をしようとしているところで 終わります
これが民数記です

500 字要約

「民数記」は、イスラエルがエジプトから救い出され、シナイ山で神と契約を結び、荒野を旅する過程に焦点を当てた聖書の四番目の書です。この書は以下のように概要できます。

「民数記」は、イスラエルがシナイ山で 1 年間滞在し、神の指導のもとで荒野に出発するところから始まります。イスラエルの人口調査が行われ、部族ごとの宿営配置が指示されます。神の臨在が宿営の中心にあることが象徴的に表現されました。

しかし、途中で民は不平不満を言い始め、約束の地への旅路が険しいことに不満を抱きます。モーセが偵察隊を派遣し、10 人の偵察者は恐れを抱き、カナンへの進出を躊躇します。結果的に、この世代は約束の地に入ることは叶いませんでした。

その後、民はモアブの平原に到着し、魔術師バラムの物語が登場します。バラムは本来民を呪おうとしたが、神の意志に反して祝福を言わざるを得ない状況に追い込まれました。これは神の契約の誠実さを強調します。

「民数記」は荒野での試練と罪、神の憐れみと恵み、そして新しい世代の出発を描き、後の聖書文学においても重要な要素となります。イスラエルが神の誠実さと慈悲に対する反応を通じて、神の計画と約束にどのように関わるかが示されています。